

家 族システムの変遷

—国家とイデオロギーの世界史

(5・完) 世界の未来

核家族レジームは機能したか

「識字化した核家族」の近代にあって、とりわけ大きな混乱にみまわれた地域。その代表格といえるのは、バルカン半島と中東です。

旧オスマン帝国の領土であったこれらの土地は、覇権が共同体家族から「識字化した核家族」に移行する中で何を経験したのか。それが今回のテーマです。

のちに「民族紛争と宗教紛争の巣窟」と化してしまうこの地域を、オスマン帝国はどのように治めていたのかを、改めて確認しておきます。

林佳世子先生は、帝国の性格について、次のように述べています。

「オスマン帝国は、当該地域、すなわちバルカン、アナトリア、アラブ地域のそれ以前の伝統を受け継ぎ、諸制度を柔軟に統合し、効果的な統治を実践した中央集権国家だった。帝国の周辺での対外的な戦争により、内側の安定と平和を守った国でもあった。」（『オスマン帝国500年の平和』（講談社学術文庫、2016年）23頁）

「あえて支配層の民族的帰属を問題にするならば、オスマン帝国は、「オスマン人」というアイデンティティを後天的に獲得した人々が支配した国としかいいようがない。「オスマン人」の集団に入っていたのは、現在いうところの、セルビア人、ギリシャ人、ブルガリア人、ボシュナク人、アルバニア人、マケドニア人、トルコ人、アラブ人、クルド人、アルメニア人、コーカサス系の諸民族、クリミア・タタール人などである。少数ながらクロアチア人、ハンガリー人もいる。要は、何人が支配したかは、ここでは意味をもっていなかったのである。」

（同・14頁）

前半は、以前ご紹介した鈴木董先生の「柔らかい専制」の趣旨と一致していますね。

ここでは、帝国における「民族」の扱いに注目します。オスマン帝国が、多民族、多言語、多宗教の人々を効果的に統治していたことは、話の前提です。林先生はここで、支配層についても、民族的帰属が問題になっていなかったことを明確にしてくれています。

オスマン帝国は、被支配民に関してだけでなく、支配層の人々においても、民族的帰属を問わない、「何人の国でもない」い、帝国であったのです。

その「何人の国でもない」国は、しかし、帝国解体後、「近代国家」を目指すと、直ちに、民族紛争、宗教紛争の地となってしまった。いったい、なぜなのでしょううか。

バルカン半島のその後

(ユーゴスラヴィアの解体)

オスマン帝国末期以降、バルカン半島に暮らしていた諸民族は、紆余曲折を経て独立し、ギリシャを除く南スラヴ地域は一度はユーゴスラヴィアとして統一されます。しかし、メソ紀53世紀末（5290年代（1990年代））の内戦でバラバラになり、現在、バルカンの地には、ギリシャを含む8つの国連加盟国と、国際社会から一致した承認を得られていないコソヴォ共和国が存在しています。

平たくいうと、バルカンの人々は、「帝国」から解き放たれた後、西欧にならって国民国家の成立を目指したが成功せず、部族国家といたいほどの小規模の国家の分立状態に立ち至ってしまった、ということになるでしょう。

なぜそんなことになってしまったのか。家族システムの変遷と関連づけて国家の歴史を見てきた後では、その理由は、かなりはっきりしているように思えます

メソポタミアに近接するこの地域、古くから多様な民族が出入りし、混ざり合っで暮らしていたこの地域を、辺境の島国で生まれた「国民国家」の流儀でまとめるといふ目標には無理があった。そういうことではないでしょうか。

(オスマン帝国のバルカン)

バルカンがどんな感じのところなのかをイメージするために、ビザンツ帝国が後退した後、オスマン帝国の支配が確立する前のバルカンの状況を、再び林佳世子先生に教えていただきましょう。

まず、前提として、バルカンの地形や都市の構造について。

「バルカン地域の特徴は、東部では東西に、西部では南北に延びる山脈が峻険な山岳地帯を形づくっている一方で、山脈と山脈の間には平野部が開け、平野部は、河川に導かれて外の世界とつながっていることにある。このため、バルカンの諸地域はその複雑な地形のわりに人口の移動が多く、山脈に分断された諸地域に多くの民族を内包することになった。」（50頁）

バルカンを私たちは「ヨーロッパ」だと思っていますが、実はトルコと一つながり、というところも、ポイントのようです。

「山がちな地形は、海峡をはさんでアジア側（アナトリア）ともよく似ている。農耕を行う定住農民、山と平地を往来する遊牧民（牧羊民）、そして山中に隠れる賊たち、農産物の集散地として点在する都市といった社会の仕組みも、共通項が多い。天水に頼る農業の手法も、基本的に同じである。ビザンツ帝国とオスマン帝国が、コンスタンティノープルをコンパスの視点として支配したアジアとヨーロッパは、自然環境やそれに規定された生産活動の面で一つながりの地域であった。」（50頁）

バルカン半島には、ビザンツ帝国が健在であった時代から、スラブ系の民族が侵入して、14世紀には「ビザンツ帝国の後退、スラブ系諸侯の分裂で、西アナトリア以上に激しい分裂状態になってい」ました。

一番有力だったセルビア王国もなんだかんだで結局は分裂してしまい、その他の地方でも、

「諸侯や王族が割拠し、互いに争う状況が生まれた。諸勢力のなかには、在地の諸侯だけでなく、黒海北岸から進出したトルコ系のノガイ族やアナトリアからの雇い兵として動員されたアイドゥン侯国などのトルコ系騎馬軍団、カタロニア兵などヨーロッパからの雇い兵軍団、ヴェネチアやハンガリーからの派遣隊など、外来の部隊。集団も含ま

れていた。彼らの存在によって、軍事的なバランスは非常に複雑だった。」(52-53頁)

オスマン帝国の祖、オスマンは、似たような状況のアナトリアで、実力での上り上がった人でした。そして、息子オルハンは、その軍勢を率いて、バルカンに入り、勢力を固めていきます。

彼らが帝国を築いたその地は、要するに、民族も出身も立場も文化もまったく異なる勢力がつねに出入りしていて、放っておけば、諸勢力の割拠、複雑な離合集散、収まることのない騒乱……といった状態に必然的に陥ってしまう、そのような地理的・歴史的な環境だったのです。

こういうところで、国をまとめるのに、「民族」などという概念を用いるバ……いえ、為政者はいません。

そういうわけで、オスマン帝国は、被支配層はもちろん、支配層についても民族的帰属を問題にしない「何人の国でもな」い国となりました。

メソポタミアで生成した共同体家族システムが、ユーラシア大陸の中央部に定着し広く拡大していったのは、多様な民族が行き来し、言語・文化が入り混じるその土地での秩序形成に適した家族システムであったからだと考えられます。

一方で長期の安定性を欠いたそのシステムは、内婚制共同体家族に進化することで、「温かさ」「柔軟さ」を付け加え、支配の安定性に寄与しました。「オスマン帝国500年の平和」は、おそらく、その基層の上で初めて成り立っていたのです。

(核家族レジームとの齟齬)

西欧近代の台頭で、オスマン帝国が退陣を強いられたとき、彼らの基層がもたらす価値は、すべて「時代遅れ」のものに見えたと思います。

トッドに学んだ私たちは、西欧の「近代化」の核心部分にあったのは「識字化」であり、「自由と民主」や「国民国家」といったスローガンではないことを知っています。

しかし、当時の人々には、「帝国」が負け、「国民国家」が勝った」と見えたはずで、したがって、当然、彼らは、無理矢理にでも「民族」を意識し、「国民国家」を目指して、悪戦苦闘を重ねていく。彼らの意識の中で、オスマン帝国は、「否定し、克服すべき対象」でしかありませんでした。

「19世紀、20世紀の歴史のなかで、多くの国が、自分たちの抱える構造的な問題を『オスマン帝国の負の遺産』とみなし、その責任を、いわば過去のオスマン帝国に押し付けてきた。」

「しかし、実際には、すべての国々に有形無形のオスマン帝国の遺産は引き継がれていた。負の遺産として挙げられる『近代化の遅れ』ばかりでなく、オスマン帝国の官僚制や政治風土、生活文化や習慣などさまざまなものが、意識されないまま引き継がれている。それらは「トルコの影響」ではなく、オスマン帝国の共有の財産・遺産である。」

しかし、それらの価値が正当に評価されることは決してありません。

「……オスマン帝国が支配下にある民族を「整理」しなかったという点は各地域にマイナスの遺産を残したとして強調され、現在のバルカンや中東の民族紛争の原因として常に挙げられる。」

なんと、「何人の国でもなかった」ことによって、500年の平和を保持したオスマン帝国の偉大な歴史が「マイナスの遺産」とは。

「とはいえ、民族を「整理」しなかったこと自体がマイナスであったはずはない。」

その通り、としかいいようがありません。ともかく、進化の頂点である内婚制共同体家族から辺境の核家族へのレジーム・チェンジは、これほどの価値観の転倒をもたらしたのだ、ということを確認しておきましょう。

（早すぎた「近代化」）

次のような疑問が生じるかもしれません。

「識字化した核家族の土地に自由主義的な国民国家が生まれ、識字化した直系家族の土地により秩序志向の強い国民国家が生まれ、外婚制共同体家族の土地に共産主義的な権力集中国家が生まれた。内婚制共同体家族は、なぜ、これと同じように、彼らの相応しい「近代国家」を生み出すことができなかったのか。」

これは、彼らの将来にも関わる問いですが、将来の可能性はこの文章の最後で検討します。

オスマン帝国崩壊以降のことについて言うと、なぜ彼らが「自分らしい近代」を作ることができなかつたのかははっきりしている、と私は思います。彼らにはまだ準備ができていなかったのです。

バルカン地域の識字率に関する歴史的データを私は持っていません。しかし、20-24歳の男性の識字率が50%を超えた時期は、トルコが5232年（1932年）、ロシアが5200年（1900年）ですから、バルカン地域は、早くてもこの中間のどこかでしょう。

要するに、彼らは、「十分な識字化人口」という、自律的な近代化に不可欠なものを、まだ持っていませんでした。

西欧近代は、まだ準備が整っていない彼らから、帝国の保護を奪い、「国民国家」の理想を与えました（もちろんそれだけでなく、列強はそれぞれの思惑でいろいろと介入もしました）。

しかし、どこにどう線を引いても、それぞれの領域の中に、民族は混じり合っているのです。

ちなみにいうと、彼らは、言語も違うし、宗教もさまざまに分布していますが、家族システムも多様です。

旧ユーゴについていうと、セルビア人、ボスニア人、マケドニア人は共同体家族、スロヴェニア人は直系家族、モンテネグロ人、クロアチア人、アルバニア人は核家族です（コソボの人口の9割はアルバニア人）。

オスマン帝国の下では、民族の違いを意識することもなく暮らしていた彼らも、「民族自決」の掛け声のもとで、近代国家を作るとなれば、話は違えます。

歴史的に見て（また家族システムから見ても）、セルビアが指導的な立場に立ったことは自然であったように思えますが、同時期にオスマン帝国から独立した台対等であるはずの民族間で、安定した支配-非支配関係を構築するのが容易であるはずはありません。

その上、ちょうどその時期が「移行期危機」に重なっているのですから……バルカン、そしてユーゴスラヴィアは、「帝国」を離れて、国民国家を目指したその日から、いくつもの時限爆弾を抱えていたようなものだったといえるでしょう。

爆弾が破裂して、例えば、ユーゴスラヴィア連邦内の一共和国が、あるいは共和国国内の一地域が「独立」を目指して蜂起したとき、かりにオスマン帝国が宗主国

であったら、直ちに反乱軍を鎮圧し、国としての統合を維持しようとしたでしょう。ユーゴ紛争のとき、ロシアに力があつたら同じことを試みたかもしれません。

しかし、現代の覇権国、絶対核家族のアメリカは、「権力への抵抗」とか「独立のための戦い」となると、一も二もなく支援に走ります。大量の武器を送り込み、何なら軍を動員してまで、旧来の秩序に抵抗する側を支持し、結果として、地域をバラバラに分解する。

そうやって出来上がったのが、現在のバルカン世界である、と言えると思います。

中東のその後

オスマン帝国終焉ののち、部族国家サイズの国家の分立状態に立ち至ったもう1箇所は、中東、とりわけアラブ世界です。

この地域の多民族、多宗教、多言語性について、あえて言及する必要はないでしょう。しかし、バルカンと同様、この地域でも、近代以前において「民族」「宗教」が問題化することはなかったということは、よくよく確認しておく必要があります。

(内婚制共同体家族の洗練)

地域のイスラム化が進んで以降（この講義の観点からは、内婚制共同体家族の拡大を意味します）、アラブ世界を含む中東では、アラブ系、イラン系、トルコ系のイスラム王朝がいくつも盛衰しましたが、

「そのすべてが民族・文化のるつぼであり、いくつもの文化層が堆積されているイスラーム世界の政治権力の常として、程度の差こそあれ、コスモポリタンな性格をもっていた。そのため、イスラーム世界の住民は、コスモポリタンな性格をもつ中央権力のもとで、王朝がアラブ系であるか非アラブ系であるかに関係なく、社会・経済生活を営んでいた。

この点、オスマン帝国も例外ではなかった。確かにこの帝国は、それまでのイスラーム諸王朝にくらべて、きわだって中央集権的な軍事・統治機構をもっていた。しかし、この帝国は同時に、納税を条件に多くの宗教共同体（ミレット）に大幅な内部自治をあたえる「ズィンマ」（保護）の制度というような、イスラーム世界に伝統的な住民を間接的に支配する方法をも引き継いでいた。こうして、住民の生活の現実には、オスマン帝国下にあってもそれまでとさほど変わらなかったと考えられる。」加藤博「オスマン帝国下のアラブ」鈴木董編『パクス・イスラミカの世紀』（講談社現代新書、1993年）166頁

オスマン帝国の時代、アラブの中心部、シリアと北イラクは、トルコやバルカンと同様の直接支配地域となっていましたから、彼らは、「オスマン人」のアイデンティティも持っていたかもしれません。しかし、いずれにせよ、彼らを含むアラブ世界の人々は、それぞれに、宗教・宗派、言語、地域等に対する複合的な帰属意識を持ちながら¹、洗練されたコスモポリタンの世界を生きていました。

この洗練された社会体制の基層に、家族システムの「進化」を見て取るのは容易です。繰り返しになりますが、共同体家族（とりわけ内婚制共同体家族）は、このような、長い歴史を持ち、多種多様な民族・文化が混淆する世界をまとめるのに最適であったからこそ、大陸中央部を席卷することになったに違いないのですから。

（帝国の終焉と「核家族国家」化）

しかし、識字化した核家族が作った「西欧近代」のレジームによって、帝国の時代は終わりを迎えます。

「オスマン帝国の中東」に関していうと、まず、オスマン帝国は、帝国自身の近代化の努力により、「トルコ人の国民国家」に変貌を遂げる。

それまで「オスマン人」であったはずのアラブ世界の人々は、突然「トルコ人に支配されるアラブ人」の立場に置かれることとなって反発し、彼らは彼らで独立を目指します。

彼らが作る「近代国家」には、本来、多様な選択肢があったはずですが。「アラブ」としてまとまるのか、「イスラーム」としてもっと大きなまとまりを作るのか。

¹ 彼らの「複雑で複合的な帰属意識構造」につき、加藤博「アラブ世界の近代」坂本勉・鈴木董編『イスラーム復興はなるか』（講談社現代新書、1993年）74頁以下。

しかし、バルカンについて述べたのと同様に、彼らもまた、識字化した人口を十分に持つてはいなかった。つまり、準備が整っていなかったのです。

彼らは悪戦苦闘を重ねつつ、欧米列強の手玉に取られていくことになっていきます。人口的な国境線が引かれ、小国家の分立状態に置かれた拳句に、核家族と直系家族の（狭量な……）「国民国家」が生み出した「ユダヤ人問題」の精算のために、パレスチナ問題まで押しつけられる。

彼らは、「識字化した核家族」によってバラバラにされ、紛争の種を巻かれた土地の上で、識字率を上昇させて本当の「近代化」に向かうと同時に、移行期危機を迎えることとなります。

内婚制共同体家族の近代化

（アラブの移行期危機）

中東には、イランやトルコのように、識字化に始まる近代化の過程をほぼ完了したと見られる地域もありますが、アラブ圏の多くはまだその最中にあります。

したがって、メソ紀53世紀（20世紀）後半から続くイスラム諸国、アラブ世界の危機—宗教的原理主義の台頭や各種暴力—は、世界のどの地域の近代化にも等しく付随した「移行期危機」の現れと見ることが可能です。

「今日イスラーム圏を揺るがしている暴力を説明するために、イスラーム固有の本質などに思いを巡らす必要はいささかもない。イスラーム圏は混乱のただ中にあるが、それは識字化の進展と出生調節の一般化に結びつく心性の革命の衝撃にさらされているからに他ならない。……

イスラーム諸国の場合もルワンダやネパールの場合も、根本的な誤りは、実はイデオロギーのないし宗教的危機を退行現象と考えることにあるのだ。

実際は逆に、そのどれもが移行期危機なのであって、その間、近代化が住民を混乱に陥れ、政治体制を不安定化するのである。」（『文明の接近』69-70頁）

（移行過程の困難）

社会の「識字化＝近代化」は、家族システムの進化を逆行するように、核家族→直系家族→共同体家族の順で継起しました（例外はあります）。そして、移行期危機の強度は後のものほど高い傾向にあります。

変化への耐性は、システムが柔軟かつ単純であるほど高いと考えられますので、もっとも進化したシステムである共同体家族にとって、近代化がより困難な経験であることは理解できます。

外婚制共同体家族の近代化は、激しい移行期危機を伴う一方で、「伝統的家族の解体→近代国家の生成」のプロセスは迅速でした。以前ご説明したように、構造的に不安定なシステムである外婚制共同体家族は、近代化に際して（現実の家族の中では）爆発的に解体することとなり、その代替物として、近代国家（共産主義的な権力集中型国家）が直ちに必要となったからです。

この点について、トッドは、外婚制共同体家族の「厳しく、暴力的」な性格が伝統的家族の解体を促進したの反対に、内婚制共同体家族が「温かく安心できるもの」であることが、上記のプロセスを遅らせ、困難なものにするであろうことを指摘しています。

「近代化はアラブとイランの伝統的家族を揺るがせた。おそらくは最後には破壊するであろう。しかしこの動きは、解放者的として受け入れられるいかなる理由も持たないのである。というのもこの地の住民は、自分たちの家族システムを愛しており、保護者的で自然なものとしてそれを経験していたからである。……アラブ諸国やイランでは、移行期危機はとりわけ、激しい過去への執着を現出した。これは愛するシステムにしがみつきたいという欲求に他ならない。」（『文明の接近』97-98頁）

それでも、「危機」そのものは、いずれは収束を迎えるはずですが。しかし、「危機」を乗り越えた後、彼らがどこに向かい、世界をどのような場所に変えていくのかは、現在のところ、かなり不透明であるように思えます。

(内婚制共同体家族の「国民国家」?)

これまでのところ、近代化の過程を（ほぼ）完了したと見られる地域では、下図のような形で、それぞれの家族システム（＝イデオロギー）に対応した国家が、一応「国民国家」の範囲に収まる形で形成されています。

内婚制共同体家族も、これと同じように、「柔軟な専制」の仕組みを持つ国民国家を形成することになるのでしょうか。

正直、ちょっと想像しにくいですね。

絶対核家族	自由主義の国民国家
平等核家族	自由・平等を謳う国民国家
直系家族	秩序志向の強い国民国家
外婚制共同体家族	権力集中型の国民国家
内婚制共同体家族	?

中東地域の国家の形成について、トッドは次のようにコメントしています。

「現在の中東危機も、国家の問題として捉え直さなければなりません。」

中東は、国家が弱い地域です。国家建設が困難であることが、アラブ世界の本質的特徴なのです。アラブ世界の家族システム、つまり内婚制共同体家族はまさに「アンチ国家」です。

内婚制共同体家族の社会システムでは、兄弟間の連帯が軸になり、実質的に、父権的部族社会が構成されます。曲がりなりにも国家が形成する場合でも、フセインのイラクのように独裁国家になってしまうのです。……

要するに、ある範囲の地域を統一し、その中で人々を平等に扱うのが本来の国家ですが、アラブ世界では、そうした中央集権的な国家を生み出そうとしてもなかなかうまくいかないのです。そういう状況のなかで、アメリカ軍がイラクに侵攻し、かろうじて「国家」として残っていた要素まで破壊してしまいました。その結果、「国家なき空白地帯」が生まれ、そこに「イスラム国」が居座ったのは、皆さんがご存知の通りです。」（『問題は英国ではない、EUなのだ』145-147）

「官僚的組織編成というものは、己れの支配空間の住人全てを非人格的かつ同等な態度で扱わなくてはならない。中央部的アラブ圏では、兄弟とイトコたちの横の連帯が、官僚機構の台頭に抵抗し、その中に入り込み、浸透し、遂には麻痺させてしまう。権力は、そこではしばしば、一つのクランの所有物、もしくは親族によって構造化された少数派的集団の所有物にすぎない。サダム・フセインのイラクにおけるティクリートのスンニ派、あるいはアサド一族の支配するシリアを統御するアラウィー派のケースというのは、まさにそうしたものであった。」
(起源・下679頁)

トッドが、ここで「国家」として想定しているのは、基本的に「国民国家」のことと考えられます。単一民族+ α 程度の人々を「国民」概念の中に収め、イギリス、フランスくらいの大きさを標準とする領域の中に統合する。そのような国家を念頭に置くなら、確かに、中東に「国家」を建設するのは困難であるといえるかもしれません。

しかし、「帝国」ならどうでしょう。中東は帝国のメッカです（すごい比喻になりました）。内婚制共同体家族がオスマン帝国の500年を可能にしたという歴史的事実を前提とすれば、彼らを「アンチ国家」と見ることは到底できないでしょう。

トッドは、おそらく「彼らが西欧にキャッチアップできるか」という（多くの西洋人が関心を持つ）問題の枠内で議論をしています。「近代化」に関しては、トッドのスタンスは明快です。アラブ世界は今まさに近代化の過程をくぐり抜けている最中であり、いずれはそれを完了する。彼は、この点について、一切の疑問の余地を認めません。

しかし、「国民国家」の形成が困難であるとする、彼らに待っているのはどのような将来なのか。

私の知る限り、トッドはその展望を語ったことはありません。でも、ここまで、家族システムと国家、イデオロギーの歴史を追ってきた私たちには、うっすら、浮かんで見えてくるものがあるような気がします。

この先はトッドの言葉がないので、妄想を広げてみましょう。

世界の未来

(世界史の流れ)

この講座で描いてきた世界史は、大体こんな感じで整理できると思います。

原初的核家族の時代 (7万年前-)

人間が「社会」の中に住み始める。世界にスペースは無限にあるので、規律は必要ない。

直系家族の誕生 (メソ紀元(前3300)年-)

中心部が「満員の世界」の時代を迎え、縦型の秩序が必要になる。文字と国家が生まれる。

共同体家族の誕生と拡大 (メソ紀1000(前2300)年-)

「帝国」が生まれ、多民族、多言語、多文化の中心部の平和と安定に貢献する。一方で「帝国」はあまり長続きしない。

共同体家族の強化 (メソ紀2400(前900)年-)

中心部で女性の地位が顕著に低下。版図は広がるが、やはり長続きしない。

内婚制共同体家族の時代 (メソ紀3800?-5000(後500?-1700)年)

「温かさ」「柔軟さ」の導入により長続きする「帝国」が可能に。オスマン帝国500年の平和に結実。

核家族ver.2 (識字化した核家族) の勃興 (メソ紀5000年(1700)年-)

辺境で小規模に国家を営んでいた核家族がいち早く近代化。直系家族がこれに続く。技術力、経済力、軍事力を高め、中央部との勢力逆転を視野に入れる。

核家族ver.2の勝利 (メソ紀52-53(19-20)世紀)

オスマン帝国滅亡。核家族の覇権が定まり、世界全体が核家族サイズ(国民国家)への組み替えを要請される。内婚制共同体家族地域は大混乱。比較的早期に近代化を果たした外婚性共同体家族ver.2が持ちこたえる。

核家族ver.2 の覇権 (メソ紀53-54(20-21)世紀)

「反権威」イデオロギーを体現する核家族ver.2 が覇権を確立。共同体家族の「権威」を敵視し、世界を敵と味方に二分する。外婚制共同体家族ver.2は受けて

立ち、正面から対立。直系家族ver.2は自身の「権威」をひた隠しにして核家族に追随する。

内婚制共同体家族ver.2の完成（メソ紀54-55(21-22)世紀）

?????

（内婚制共同体家族の未来）

内婚制共同体家族ver.2が完成したとき、どんな世界がもたらされるのか。現在の中東情勢をよく知る人ほど、あまり楽観的にはなれないかもしれません。

しかし、バルカンについて述べたのと同様に、中東の現在の苦境には、かなり明確な理由があるといえます。

内婚制共同体家族の困難は、おそらく、近代化の準備が整う前に「帝国」を奪われ、核家族サイズの国家をあてがわれた点にあるのです。

「核家族への回帰」という事態は、進化した家族システムを基盤に民族や言語や宗教の違いを克服してきた彼らにとっては、5000年の進歩を否定され、その以前にタイムスリップさせられることに他なりません。

西側の先進国の干渉によって手足を縛られ、5000年前の「振り出し」に戻され、想定ルート上にたくさんの地雷を仕掛けられたところで、近代への「移行期」が始まったのだとしたら、それが、困難なものにならないはずはありません。

とはいえ、近代化の過程は着実に進展しており、近い将来に完了することが確実です。歴史的に関係の深いアフリカ大陸を含むアラブ文化圏の大きな人口が、教育水準を上げ、心性の一定の安定を見たときに、何が起こるのか。

オスマン帝国について教えて下さった林佳代子先生は、旧オスマン帝国地域の現在の混迷を前に、以下のように書かれました。

「「民族の時代」を生きる現代のバルカン、アナトリア、中東の人々が、オスマン帝国の末裔である事実は揺るがない。もしも、過去の記憶に、「未来」をつくり出す力が本当にあるとするならば、バルカン、アナトリア、中東の人々が、かつてオスマン帝国を共有した記憶は、意味のないことではないだろう。その時間は500年にも及ぶ。その事実がバルカン、アナトリア、中東の人々の共通の記憶として、誇りを持って語られる時代の到来を願いたい。」（375-376頁）

まるで祈りのような言葉です。いろいろ教えていただいたお礼を込めて、もし機会があるなら、次のようにお伝えしたい。

「先生、大丈夫です。彼らの多くは内婚制共同体家族システムを共有していますから！」

彼らが意識の上でオスマン帝国を否定しようがしまいが、彼らの無意識には内婚制共同体家族の心性が刻まれています。したがって、彼らが近代化の過程をくぐり抜けた暁には、彼らの一挙手一投足が、しかるべき「未来」を作り出すに違いない。現在どれほどの苦境にみまわれているとしても、決して悲観すべき状況ではないと私は思います。

おわりに（想定される近未来）

私の知識と想像力に大幅に限りがあることは認めます。その上で「でも普通に考えたらこうなるよね？」と思えることを書いて、まとめに代えたいと思います。

- ・内婚制共同体家族はいずれ内婚制共同体家族ver.2になる。
- ・識字化人口の数的優位により世界の中心を占める。
- ・自分たちの居住領域において、彼らは「核家族サイズの国家の分立状態」に満足せず、新たな秩序を模索する。
- ・新たな秩序は、何らかの強大な権威に裏付けられた宥和的なものとなる。
- ・かりに「イスラム」を掲げたとしても内実が世俗的なものであることは間違いない。
- ・「権威による平和」を志向する彼らは、世界の中心に返り咲く過程で、「権威との戦い」「競争による秩序」を志向する核家族とぶつかる。
- ・核家族側が妥協しない場合、大きな紛争が生じる。
- ・外婚制共同体家族との関係は、交渉次第（内婚制共同体家族の包容力が問われるところか）。
- ・内婚制共同体家族ver.2が中央、核家族・直系家族ver.2が周縁という当初の配置において平和を回復する。

これは私の「願望」ではありません。家族システムの変遷に基づく世界史を書いてきた筆をそのまま少し先に進めてみただけです。「順調に行った場合の近未来」の予測ではありますが、当てようとも当てたいとも思っていません。

でも、正直、内婚制共同体家族ver.2が作る新しい秩序を見てみたいな、とは思いますが。核家族ver.2の「自由」は魅力的で、世界中に新しい風を吹き込みました。しかし、昨今の世界情勢を見ていて、「核家族のやり方で世界を平和にまとめるのは無理なんだな」と、私はしみじみ理解しました。直系家族にもその力はないし、外婚制共同体家族はちょっと強面すぎる。多様性をそのままに、世界をそれなりに平和に統合するという役割にもっとも適しているのは、内婚制共同体家族システムなのではないか。

「だったら、われわれも内婚制共同体家族システムを採用して平和裡に世界を征服しよう」といってできるものではないし、気に入ろうが入るまいが、内婚制共同体家族がver.2として再浮上する過程にあるならば、それを止める手立てはないのです。

無責任に聞こえるとは思いますが、みんながそうやって腹を括れば、世界はかなり平和に近づくとおもいます。